

正福寺伝



正福寺

はしがき

三、四年前のことになると思いますが、一宮市史の編さんについて、私どもの方へも、大学の先生方や郷土史家の皆さんが、資料調査においでになりました。そして、昨年、上下二巻の一宮市史が立派にできあがりました。

私は、一宮市史に当寺のことが書かれ、もともと、寺宝として伝っている「正福寺由緒書」があることを思い、この際、何とかして、寺の尊い歴史をまとめたいと考えました。

そこで檀家の太田克巳先生が、ながく、教職にあられ、御在職中は、愛知県小中学校校長会長を勤められ、「子とともに」を出している愛知県教育振興会には、御関係も深く、教育出版におくわしいことを知っていたので相談にあがりました。

先生は、私の考えをお聞き下さって、心よく、お引受けいただき、お若い方にもわかりやすく、ここに、「正福寺伝」として、おまとめいただきました。

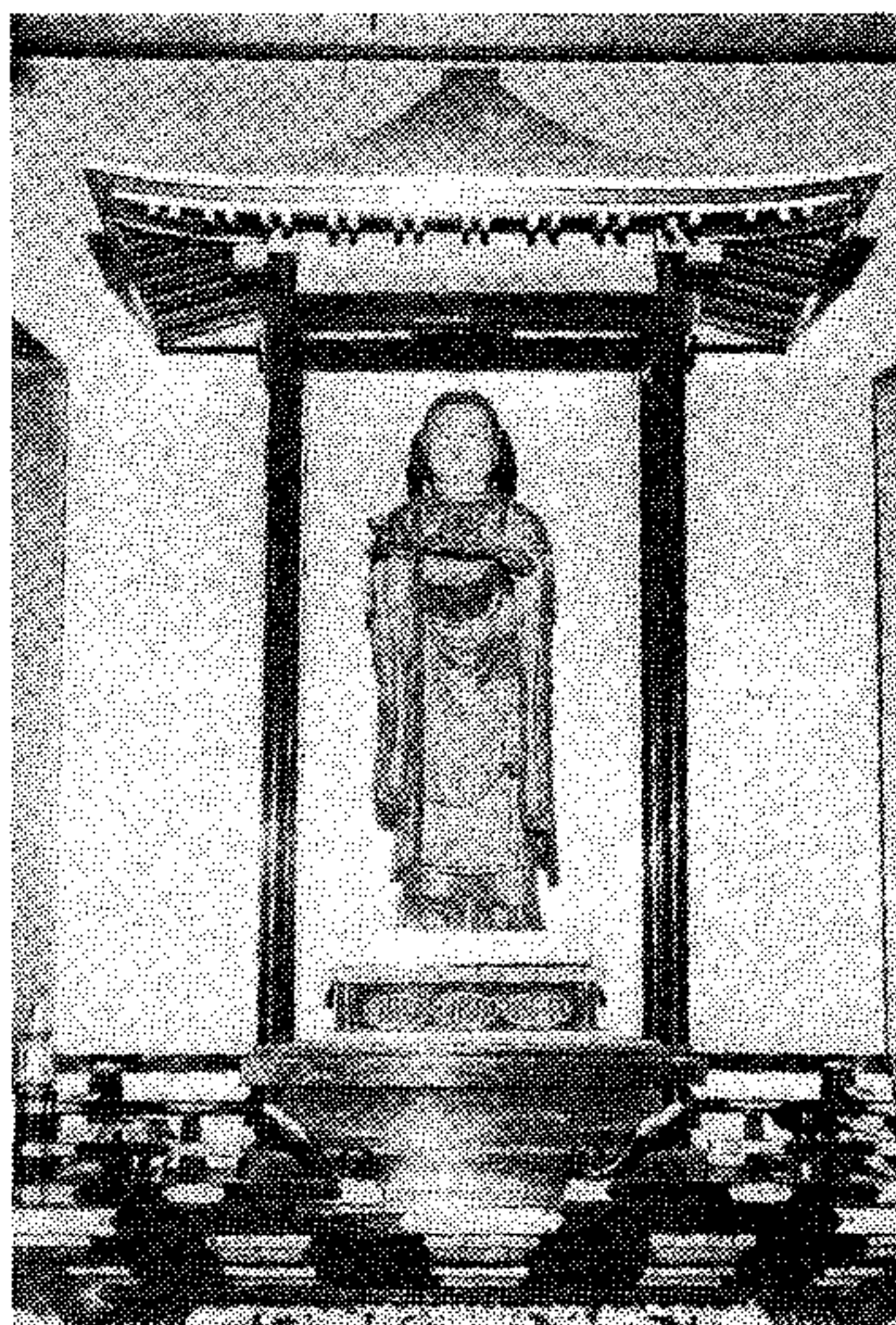
この冊子が、少しでも、お役に立てばありがたいと思えます。

昭和五十五年二月一日

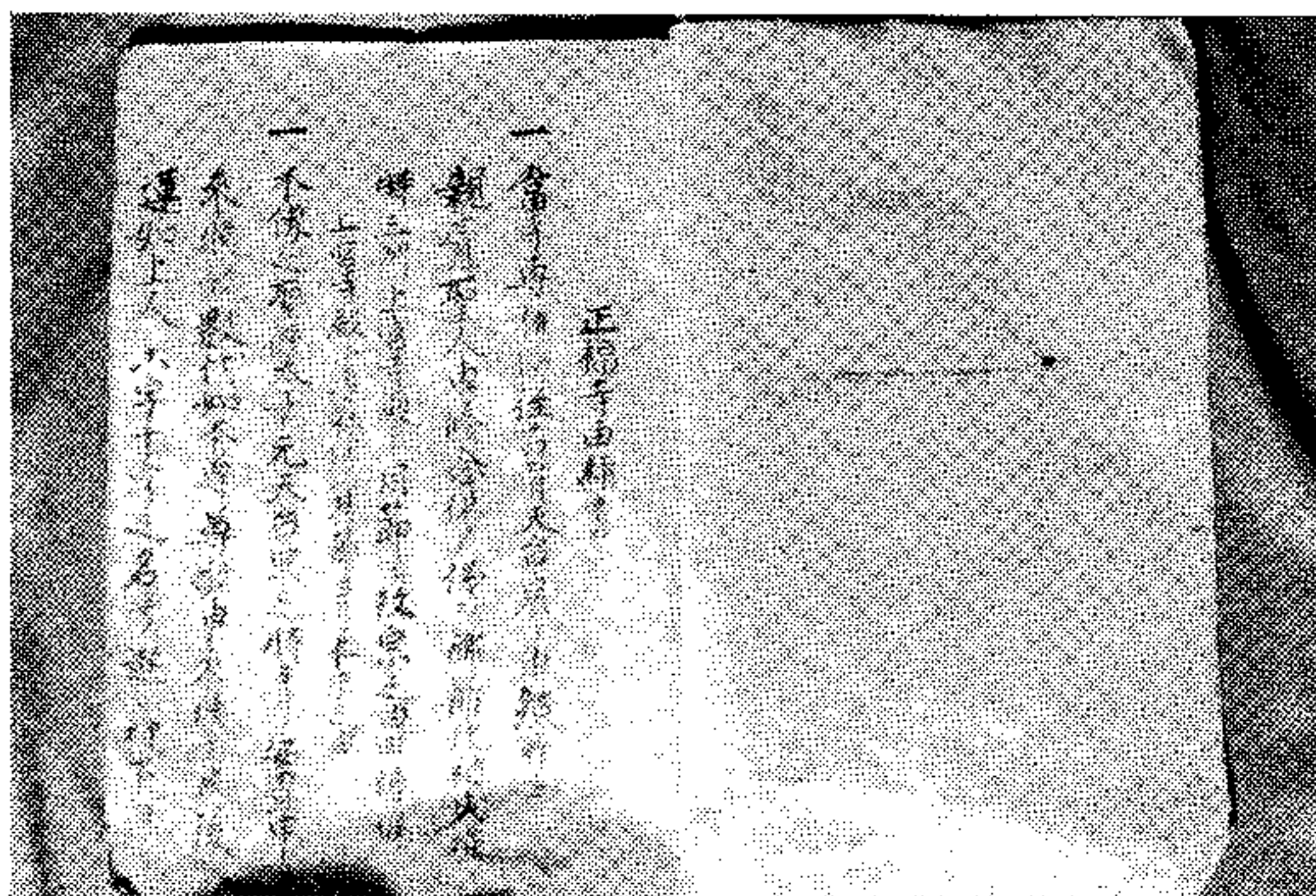
正福寺住職 足立禮誠



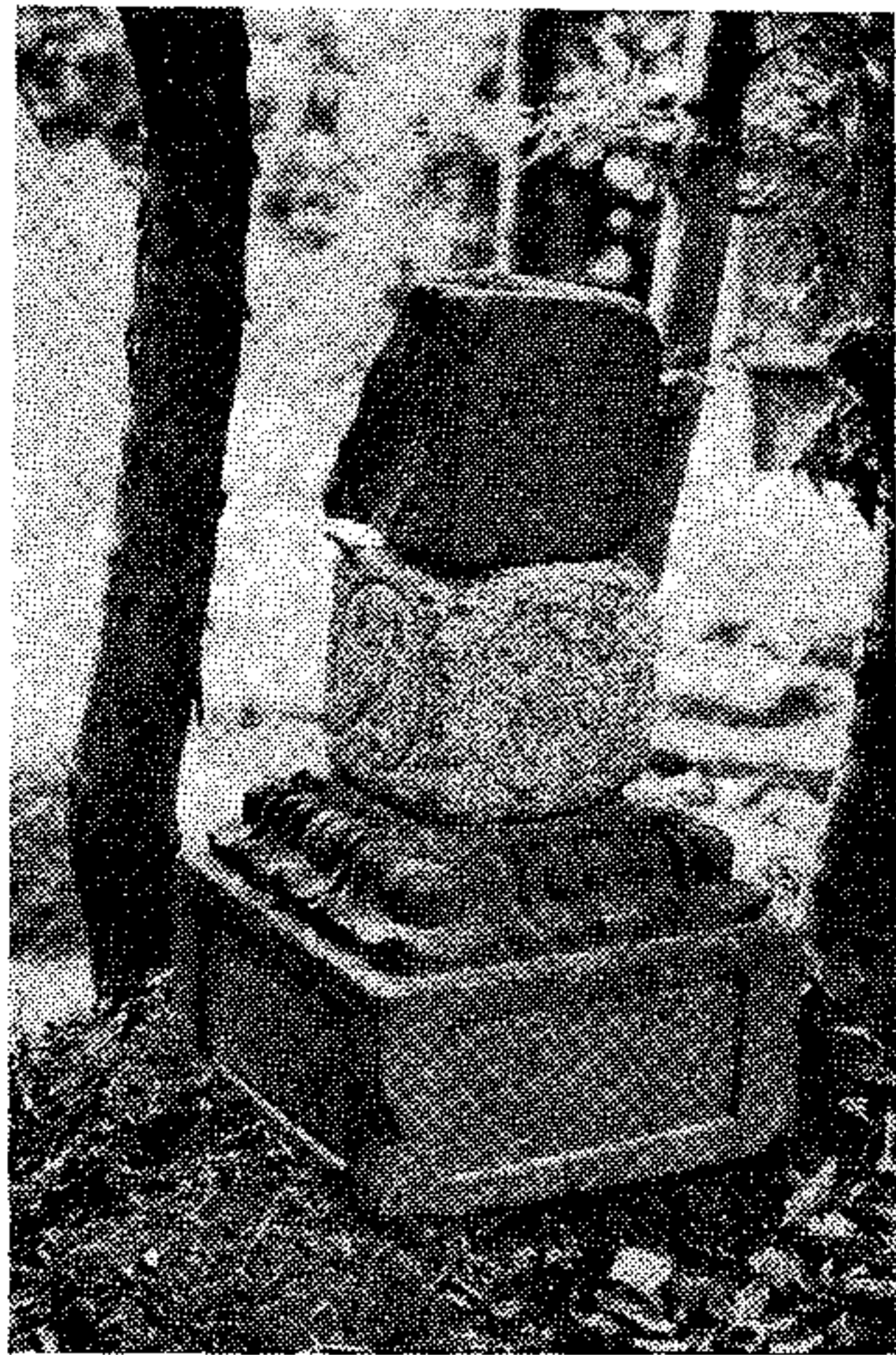
親鸞聖人像（御真作）



聖徳太子立像（御真作）



正福寺由緒書



宝篋印塔



山門



玄關



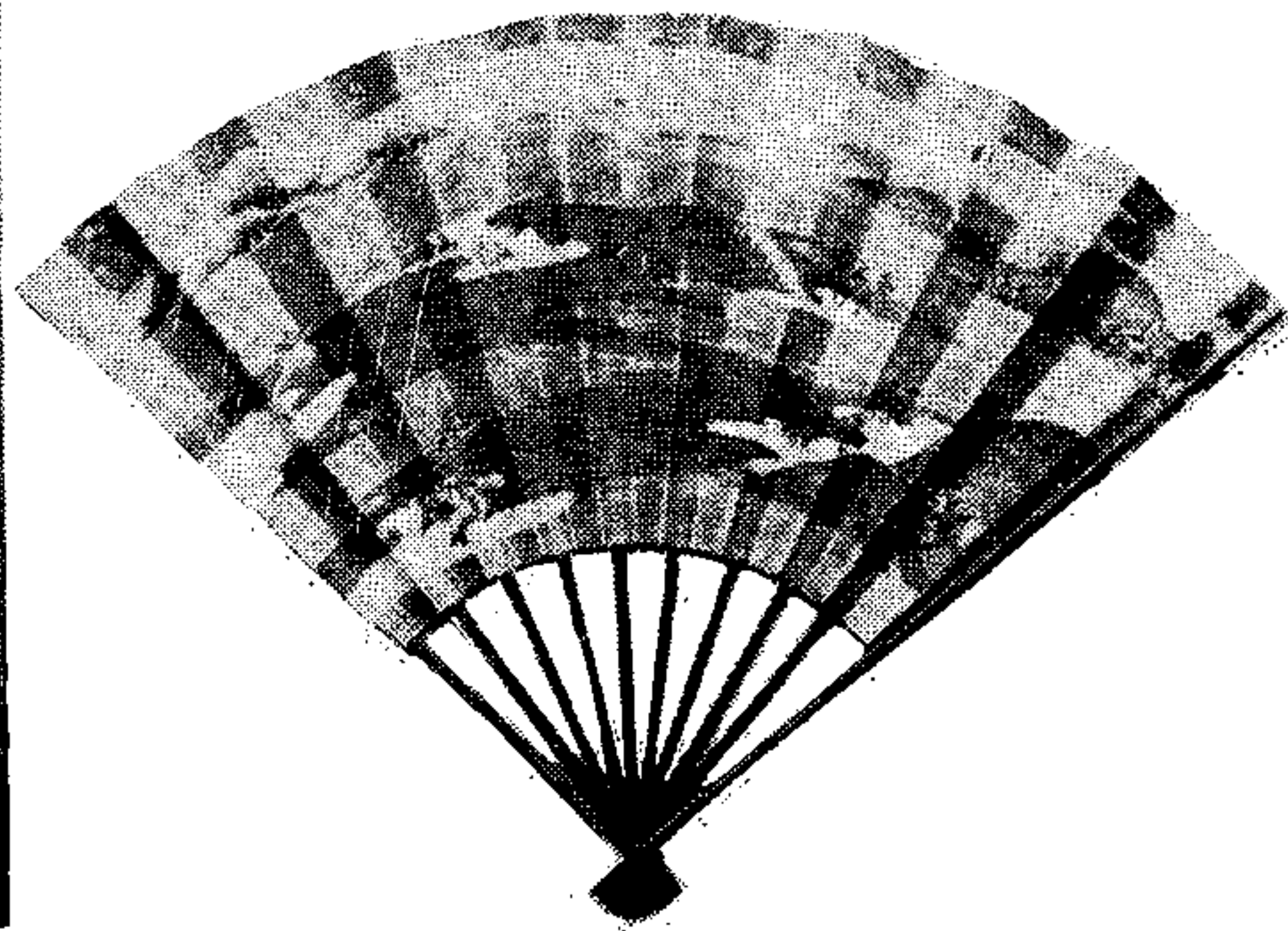
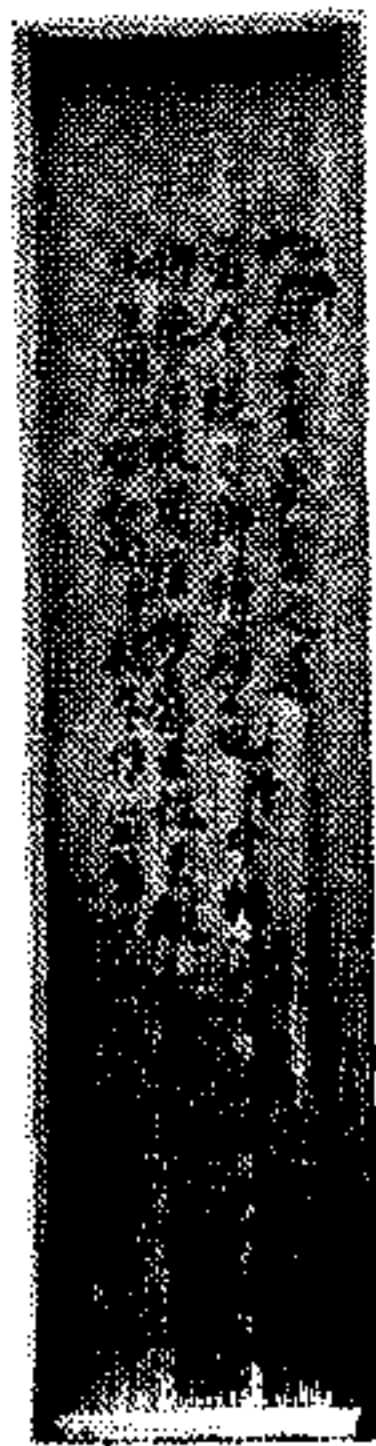
鐘樓堂



十字名号 (真如上人筆)



四字名号 (源空上人筆)



扇子

尾張野のあけぼの

ひろびろとした濃尾平野は、その位置が国の中央にあつて、土地がひろく肥沃です。その上、気候も温暖ですから、くらしよいので、昔からよく開けました。

それは、木曾川をはじめ、長良川・揖斐川が上流から土壌を運んで、この大平野をつくり、そこに農耕文化が育ったからです。

荻安賀付近の、町屋・馬見塚・二子など多くの古墳群は、この辺りに縄文時代の終りにすでに、村のあったことをしめています。ちょうど、紀元前後のころ、約二千年位前です。

時代が進んで、大化の改新（六四六）は、大和朝廷が中央から国司を任命して、地方の政治を行うようになりましたが、その所在地を国府といい、尾張の国府は稲沢市の松下にありました。ここが、尾張の国の政治の中心でした。尾張は南部を除いては、こうして早くから開けたところです。

鎌倉時代までは、奈良や京都が日本文化の中心でしたが、江戸に幕府が移ってからは、東西文化の接点として濃尾平野の重要性はいっそうまされてきました。

江戸時代には、街道が縦横にでき、木曾川の河川交通の恩恵などもあつて、明治の文明開化には大きな役割を果たすこととなります。とりわけ、尾張徳川家が、徳川御三家の筆頭として、この地を領してから、親藩の威力もあつて、治水を始め各方面にわたって善政がつづきました。

街道筋の村

国を治め、政治をやりやすくするためには、街道をととのえることが必要です。家康は、鎌倉時代にできた鎌倉街道を改めて、江戸と京都を結ぶために、海より東海道をつくり、山より中仙道をひらきました。

尾張の宮（熱田）から、伊勢の桑名の宿までの海上七里の渡しは、いろいろ不便がありましたので、陸路を京都へいけるように考えたのが美濃路です。

美濃路は、名古屋から清須（清州）・稲葉（稲沢）・萩原・起・墨俣すのまた・大垣の各宿をへて、垂井で中仙道と結びました。江戸から京都への近道として、大名の参勤交代も、朝鮮や琉球の使節も、みな、ここを通りました。

「折にあいて所をきけば萩原の秋のはじめの旅のゆくすえ」

と將軍家光は、萩原宿の旅の感慨をうたっています。

当時の萩原宿は、西に伊吹山や養老山系が一望でき、前には、木曾の大河があるといった眺めのいいところでした。この辺りは、田畑のうちつづく中に、春は麦がのび、村里に桃の花が咲き、冬は葭簀よしずに干した大根切干が、伊吹嵐おろしにあたって、まっ白に見えるといった尾張野の風情がありました。この萩原宿は、相当に大きく、身分の高い人が泊る「本陣」「脇本陣」もあり、問屋とんやもあって、馬などの用意もありました。

その後、尾張藩は、元和元年（一六一九）にいたって、六角堂から美濃路と別れて、一宮から北方きたがたをへて、岐阜にはいる岐阜街道をつくりました。一宮宿は、このころから活況を呈してきました。大赤見から、一宮・荻

安賀・萩原・森上・丸淵をへて津島へと、西尾張を貫ぬく街道は、尾張藩の御巡見道ごじゆんけんみちです。刈安賀は、一宮と萩原のまんなかにある街道筋の村としてさかえました。

西の守り

近江の浅井氏の一族であった、浅井新八郎高政は刈安賀に城を築きました。この城は、その子田宮丸と二代にわたる居城でした。新八郎は、そのころ、亡びた岩倉城の町人や寺院を多く刈安賀にひきよせて、町をつくったといわれます。

田宮丸は、信長の子信雄の三家老の一人でしたが、秀吉のために、伊勢長島で討たれました。この城は、東西四十二間、南北三十二間の構えをもち、二重の堀をめぐらしていました。今、「刈安賀城址」の標柱が、町の南の道端に立っています。この辺りは、少し小高い畑ですが、この西には部落があり、七ツ寺といった当時の寺屋敷の名残があります。田宮丸の母は、田宮丸亡き後も、この地にとどまり、土地の人々から「刈安賀どの」と尊

敬されました。

刈安賀には、正福寺を始め、いくつもの寺が集まっています。戦国のころは、地形上、西の守りとして、いざという時に、美濃にそなえたといわれます。

もともと、ここは農地もひろく富裕でした。尾張一帯は、仏教のさかんなところですが、これは、土地柄、尾張の人々の信仰心が厚いといえましょう。しかし、政治的・経済的な基盤がしっかりしていることも見逃せません。

珍しいのは、江戸の中ごろに「六斉市ろくさいいち」という市が立ったことです。この市は、月に六回、日をきめて開く市のことです。藩主宗春のころに始まっています。一宮や岩倉のもこれと同じです。この市にも、経済的発展の芽生えがあります。

なお、尾張第一代の源敬公げんけいこう義直はここに行殿ゆきどのといった別荘をつくった程です。

正福寺由緒書

「正福寺由緒書」という古文書は、古くから寺に伝わ

った記録です。この由緒書は、第十一代の住持、了恵の書いたものです。了恵は寛政四年（一七九二）に亡くなっていますので、この古文書は二百年近く前のものといふことになります。この古文書には、美濃紙十五枚に、正福寺はもと専称坊せんしょうぼうといったこと、聖徳太子像のこと、開基は了西であること、講や本山ならびに上宮寺との関係、天皇から「足立」の姓を賜わったこと、末寺のことなど詳しく書いてあります。

専称坊

正福寺は「聖徳院橋本山正福寺」といいますが、この寺は、もとは、天台宗の寺で、「専称坊」といいました。このことは、由緒書にも出ていますし、本堂の礎石の一つに永徳二年（一三八二）と彫った宝篋印塔ほうきやくいんとうの基礎が使っていることでもわかります。この年号から推定すると、専称坊は六百四十年位前の南北朝時代に既にあったことになりました。

寺の沿革書を見ると、開基は、了西であり、貞永二年

(一二三二) 三月にできたと記してあります。そして西は、宗祖太子が関東より御帰洛きらくのみぎり、上宮寺と共に、見真大師の弟子となって、ご自作の肖像を賜ったと書いてあります。このことが、由緒書には、大永か享禄かはっきりしておりません。大永とすれば千五百二十一年で、四百五十年位前の足利時代の終わりということになります。

浄土真宗の布教

親鸞上人は、仏教の教えを易しくして、ひたすら念仏をとなえよと教え、このことを専修念仏せんじゆねんぶつといいました。この御勸化かんげによって、浄土真宗に改宗した寺は、全国にたくさんありました。なかんづく、蓮如上人のご布教は教えがわかりやすく、世の人の信頼を集めました。

三河に、上宮寺という寺がありますが、この寺は、三河に六十四か寺、尾張・美濃・伊勢に四十一ヶ寺、更に尾張の末寺だけでも二十ヶ寺からある多くの寺を支配していました。

正福寺は、この上宮寺と共に改宗しました。蓮如上人が山科の御坊においでのところ、住持は、上宮寺の如光と共にその御難儀をお救いしたということです。始めは、上宮寺の末寺であった正福寺も、寛文六年(一六六六)には東本願寺の直参じきさんになりました。直参というのは、格の高い寺のことです。

蓮如上人のおちからによって、本願寺はすばらしい発展をしました。それは、お寺がその地域の信仰の道場となり、門徒である人達の心のよりどころとしたことにあります。門徒や講が宗教的な結びつきを強め、経済的な支えになったことは見逃せません。

「證如上人日記」のなかにも、尾州中なか十六日講とか、尾州三日講がでています。正福寺の由緒書によると、第四代了誓のころには、三日講、五日講、二十日講、二十五日講などいくつもでています。本山への銭集めの寄進など多かつたようです。

一向一揆の戦い

織田信長の父は、信秀で勝幡城主でした。信秀父子の領国支配の野望はつよく、戦国のきざしがありました。

その後、織田氏は勢力を得て、京都に上ることになりましたが、じやまになったのは、本願寺の勢力でした。

近くでは、石山本願寺頭如上人の檄を受けた長島一揆は、北伊勢、尾張西南、南濃などの門徒を集めて、織田の軍勢と戦いました。四年にわたる戦いの後、一向一揆は敗北しました。元亀元年（一五七〇）のことです。

このころ、三河にも、一向一揆が起こり、その責任者であった上宮寺の勝祐、信祐父子は戦いに敗れ、正福寺に身をよせていました。この父子も、長島の戦いに出陣しましたが、刈安賀に帰ったところを、城主浅井新八郎の兵に囲まれて、正福寺で自害しました。上宮寺には、この情景を描いた絵巻物が今も残っています。

教如上人

第四代了誓のときのことです。教如上人が奥州へお

もむく徳川家康をお見舞になつての帰りのこと、石田治郎少輔が、じやまをして道を通しませんでした。了誓はいろいろ苦心をして、木曾川をお渡ししました。

この時、上人は正福寺に二十日余りもご逗留になりました。上人は、前住上人の御影をご覧になって、御讚、御銘を裏書されました。また、聖徳太子の木像をご覧になって、太子堂を建てるよう仰せになりました。その後は二月二十二日には、御絵伝の間で朝夕お勤めをします。

教如上人とは、御縁がふかく、上人が関東へ御下向の時には、毎度お宿とされました。その時は講中の方々もいろいろとお取り持ちをしました。

足立の姓

妙興寺は、御光厳天皇の貞和四年（一三四七）に円通大応国師が開山されたもので、天皇の勅願の道場でした。そして、南北朝時代には、尾張の北朝の中心でした。

第五代定龍の時、天皇が妙興寺へ御幸になったことがあります。その時、「足立」の姓と巻物を賜わる光榮に浴しました。寺からは、お菓子を献上しましたところ大變お喜びになったといひます。重宝な巻物と大切にしていましたが、いつのまにか紛失して残念の極みだと由緒書にも書いています。

十五の末寺

第一代了西のころ、末寺が十五か寺ありました。由緒書によると、氏長村中坊、高田村高正坊、勢州福永村覚法坊、花井方村浄光坊、奥村林正坊、一ノ宮村真養坊、於保村寿専坊、沖村専寿坊、高井村法蔵坊、石橋村正乗坊、木全村専光坊、当地智専坊、この他に於保村に三か寺と記されています。

一宮市史によると上宮寺の末道場であった専称坊（正福寺）は、末末道場として、多度福永に一か寺、於保の徳専寺他一か寺、木全の西勝寺、花井の光樂寺、一宮の高陰寺、奥の西宝寺、浄流寺、南高井の浄真寺、石橋の

善慶寺、毛受の龍明寺など十一か寺がありました。かなり、格式の高い寺だったことがわかります。

仏様と什物

正福寺に伝わる仏様や什物のおもなものは、次のようですが、裏書や御讃はそのまま記しますと、

聖徳太子立像 三尺二寸 御真作

聖徳太子の御真作と伝えられます。太子四十二才の時、諸国を御巡回のみぎり、柳堂やなぎどうに御逗留になりました。その時、老翁が古木を持ってきて、この木は数年前より光を放つ霊木ですと行ってさしあげました。太子は大變お喜びになり、彫刻されたといわれます。人呼んで「橋本の太子」といいます。尊いお姿に美しい彩色があります。

本尊阿弥陀如来木像 二尺 作者不詳

明治二十九年濃尾大地震後台座が修復してあります。

見真大師木像 七寸 御真作

見真大師は親鸞上人のことです。この仏様は上人のご真作で、了西のいただいたものです。庫裡くらりの仏壇に安置してあります。

上宮太子真影 (印は剝落のしるしです)

本願寺釈琢如 (原本花押あり)

寛永四季甲辰夾鐘廿二日

書之

上宮寺下尾(原本「州」)中島郡

刈安賀村正福寺常

住物也

敬禮救世觀世音

伝燈東方粟散王 願主釈了智

從於西方來誕生 寄進釋良正 (原本剝落)

皆演妙法度衆生

上宮太子は聖徳太子のことです。

聖徳太子絵像 御裏琢如上入

寛文四年四月十二日

三朝高祖真影

本願寺釈琢如 (原本花押あり)

寛文四年甲辰如月

廿二日書之 (原本剝落)

上宮寺下尾(原本剝落)州中島郡

刈安賀村正福寺常住

物也

願主 釈了智 (原本剝落)

寄進 釈良正 (原本剝落)

本願寺釈実如

明應五年(由緒書「五」とあり)丙辰六月九日

三朝高祖とは、印度で二人、支那で三人、日本で二人の仏教の先覚者のことです。

方便法身尊像

三河国佐々木上宮寺門徒

尾州中嶋郡福重保花井

願主 釋性專

本願寺釋實如

大永元年辛巳九月五日

方便法身は阿弥陀如来のことです。

方便法身尊影

願主 釈了西

正福寺下

佐々木上宮寺門徒尾州

中嶋郡苅安賀專稱坊

願主 釋了善

(由緒書になし)
正福寺

樹心弘誓佛地

流念難思法海

帰依思無他事

仏恩深無窮盡

本願寺前任釈證如

前大僧正一如御朱印有

大谷本願寺親鸞聖人縁起

尾張国苅安賀村

正福寺常住物也

未三幅者御絵之通

願主 釋了恩

野村長右衛門事

寄進 釋良味

この画像は裏書だけです。

本願寺親鸞聖人御影

大谷本願寺釋教如

慶長三戊戌年八月十一日

尾州中嶋郡苅屋

須賀村花井正福寺

常住物也

觀彼如来本願力

凡愚遇无空過者

一心專念速滿足

眞実功德大寶海

和朝親鸞聖人

證如上人眞影

釈眞如

天正十（由緒書に「年」字千支の上にある）午年九月廿四日

天和三年癸亥曆二月十六日

是ハ御箱之上ケ申月也同十七日遊

（裏表紙）

尾碕中嶋郡苅安賀村北市場（花押か）口

裏書の剝落がひどく、わずかに「證如上人眞影」「嶋郡苅安賀専称」と判読されるのみです。

大本絵之本尊

眞如上人之御時御免

釋眞如 御判

見眞大師絵伝 御裏 一如上人

四幅 天和三年二月十六日

慧燈大師絵像 御裏 現如上人

明治四十一年三月四日

慧燈大師は蓮如上人のことです。

乗如上人絵像 御裏 達如上人

文化四年六月廿四日

達如上人絵像 御裏 巖如上人

明治九年八月廿日

巖如上人絵像 御裏 巖如上人

明治十四年十一月十九日

十字名号 眞如上人 眞蹟

延享元年 春
帰命盡書十方无导光如来と書いてあります。

四字名号 源空上人 真蹟

阿弥陀仏と書かれています。源空上人は法然上人のことです。

六字名号 慧燈大師 真蹟

六月九日 秋

南無阿弥陀仏と書かれています。慧燈大師は蓮如上人のことです。

宝篋印塔基礎銘

昔の墓石の一部で本堂の礎石にしたもの
右側に永徳二年、左側に卯月十三日とあります。

御文章 證如上人 御判

扇子

桜町院様の御子當今様お持ちのもの、箱書に宝曆十年とあります。

太刀 二本

正福寺住持に帯刀を許されてきました。

御籠

正福寺住持使用のもの、籠は朽ちていますが、吊木は黒塗りのままです。

山門

名古屋城より移築のものと伝えられています。牡丹に獅子の墓股は見事な作です。

なお、時代を調べると、大永元年（一五二一）は四百五十八年前で、足利將軍義植のころ、天正十年（一五八二）は三百九十七年前で織田信長のころ、寛文四年（一六六四）は三百十五年前で徳川光圀が「大日本史」をつくったころですから古く貴重なものです。

寺の建物

本堂を建立したのは、第六代了智で、本願寺釋琢如たくじよの御判をいただいています。

了智は元禄六年（一六九三）になくなっていきますので、この建物は、およそ二百九十年程前のものです。しかし、火災にあったかどうかはわかりません。

規模は、境内東西三十間、南北三十五間、本堂は七間四方です。この他に庫裏、廊下などがあります。

明治二十四年十月二十八日の濃尾大地震には、倒壊したので、時の住持禮幹れいかんは、檀家にはかり、現在のような復興をみました。

山門は、檀家の尾張士族野村長兵衛（万治元年没）が尾張侯に仕えていた縁で、城内より移築したものと伝えられています。この山門は、優美でおちついた風格があります。

鐘楼堂は、昭和四十三年十月に改築したものです。昭和十七年の調査で当局に届け出た書類は次のようです。

本堂	御堂造 桧櫓屋根瓦葺	九一坪
庫裡	切妻造 松杉桧瓦葺	四八坪
玄関	唐破風造 桧瓦葺	二〇坪
鐘楼	三ツ堂造 棒屋根 仮トタン	二坪五合
門	大棟門造 棒瓦葺	二坪五合
手水屋	形切妻造 桧瓦葺	一坪五合
物置	平屋造 杉松瓦葺	四坪
香部屋	本堂裏 庇 桧瓦葺	十一坪
座敷	寄棟造 桧杉瓦葺	十坪
茶席	平屋造 桧杉瓦葺	十坪
炊事場	平屋造 雑木瓦葺	四坪
湯殿	平屋造 雑木瓦葺	五坪
便所	平屋造 杉セメント葺	一坪五合

寺小屋

愛知県教育史の「愛知県寺小屋一覽」によると、県下の寺小屋総数は約四千二百といわれ、全国で最も多い県です。

江戸末期から、明治五年の学制発布までの寺小屋教育は、わが国の学校教育の夜明けです。村々の寺で行われた寺小屋教育は文字どおりの村民教化でした。

正福寺では、足立晃海を師匠ししやうとして、天保四年（一八三三）から明治五年（一八七二）までの三十九年間経営されました。当寺の子弟数は三十人で、その内、女子は十人でした。教科は読、書でしたが、他の寺もほとんど同じでした。この村に個人経営の塾も三か所ありました。

昔から、どの家庭でも仏様にまいり、寺では、朝夕、鐘がつかれました。この鐘の音を聞くにつけても、年々たえることなく報恩講や太子講、永代経の勤められたことを考えても、このことが村人の心をどんなに温かくし、日々の暮しのなかに、感謝報恩の気持をうえつけたかわかりません。

歴史年表

代	住持	歿年月日	本願寺御歴代	主な事項
一	了西	大享永年中 大祿年中 大享年中	第九代人 實如上代人	浄土真宗に改宗する 方便法身尊形をまつる 大本絵の本尊をまつる
二	了慶	天文年中 天長年中	第十代人 證如上代人	
三	了善	慶長十六日 長四十六日 長四十六日	第十一代人 頭如上代人	本願寺親鸞聖人御影をまつる
四	了誓	巳八月十日 巳八月十日	第十二代人 教如上代人	證如上人真影をまつる 上官寺勝祐、信祐自害する 寺号を正福寺とする
五	定龍	元和八年 元和八年	第十三代人 宣如上代人	天皇より「足立」の姓を賜わる
六	了智	元祿六年 元祿六年	第十四代人 琢如上代人	聖徳太子絵像をまつる 三朝高祖真影をまつる 本堂を建立する
七	了恩	享保八年 享保八年	第十五代人 常如上代人	本願寺直参となる
八	了信	天文四年 天文四年	第十六代人 一如上人	大谷本願寺親鸞聖人縁起で きる
九	了契	天明二年 天明二年	第十八代人 從如上代人	

註 この年表は、過去帳由緒書をもとにまとめたものです。

一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
慧廣	了恵	恒智	一乘	三性	智徳	務修	称徳
宝歴十四年	寛政四年	天明四年	明治十六年	明治十六年	明治二十七年	昭和十三年	昭和十五年
〃	第十九代人 乘如上代人	第二十代人 達如上代人	第二十一代人 巖如上代人	〃	第三十二代人 現如上代人	第三十三代人 彰如上代人	第三十四代人 蘭如上代人
	正福寺由緒書で きる	寺子屋を開設する			濃尾大地震で本堂倒壊する		

あとがき

御住職から、正福寺の歴史をまとめてほしいといわれ、おひきうけしたのは、昨年の冬でした。

「正福寺由緒書」をはじめ、いろいろの資料をもとに、若い方々にも、よくわかっていただけるように心がけましたが、むつかしいことでした。

私は、正福寺の檀徒の一人として、このご縁をもたせていただけたことを、しみじみ、ありがたいことだと思えます。

この冊子が少しでも皆様のお役にたてば幸いです。

昭和五十五年二月一日

太田克巳

参考文献

- | | |
|--------|--------|
| 正福寺由緒書 | 尾張国地名考 |
| 一宮市史 | 尾張古地図集 |
| 愛知県教育史 | 一宮郷土読本 |

表紙写真 正福寺本堂
裏表紙写真 家紋

正福寺伝

昭和五十五年四月十五日 発行

発行所 正福寺

一宮市大和町苅安賀三〇一七

印刷所 菱源印刷工業株式会社

